The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	一九四三年九月-一二月 私小説「作家手帖」と戦記物「軍隊手帖」と
Author(s)	大國, 眞希
Citation	太宰治スタディーズ. 2016, 6, p. 28-31
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/57196
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【戦局】

▼9月

・イタリア無条件降伏

・二五歳未満の未婚女子、勤労挺身隊に動員

・御前会議〈今後執るべき戦争指導大綱〉およびこれに基づく〈当面の緊急に関する件〉を決定

▼10月

・在学徴集延期臨時特例（昭和一八年勅令第七五五号）公布。理工系と教員養成系を除く文科系の高等教育諸学校の在学生の徴兵延期措置の撤廃

・フィリピン共和国独立宣言

・文部省・学校報国団本部、徴兵延期停止により出陣する学徒壮行大会を神宮外苑競技場にて挙行

▼11月

・兵役法、改正。国民兵役は四五歳まで延長

・マキン島・タラワ島に米軍上陸。両島で五四〇〇人玉砕

一九四三年九月―一二月　私小説「作家手帖」と戦記物「軍隊手帖」と／大國眞希

奇しくもこの時期には太宰治の「作家手帖」と火野葦平の「軍隊手帖」とが発表されている。第一回の芥川賞の候補に挙がりながらも受賞を逃し（「私見によれば、作者目下の生活に厭な雲ありて、才能の素直に発せざる憾みあつた」）、文壇の話題となったことが〈作家太宰治〉生成に影響を与えていることは広く知られている。一方で火野葦平は第六回芥川賞を受賞した（「出征中と云う政治的条件すら、申分無かつた」「端睨できない程の変つた素材を駆使する点、面白い作家だが、只行文が未だお話の程度で創作の域に至らない憾があつた」にも拘わらず「的確に新しい戦争文学を期待してもいい」）。報道部に所属し、戦地物／戦争文学を書くベストセラー作家と、身体検査を通過せず「内地」にて諧謔的に銃後の生活などを書く作家。芥川賞を軸として、二者は対極に位置している印象を与える。実際、例えば福田恆存「文学至上主義的風潮」（「新潮」一九四三・二）では、太宰作品は私小説のほうに、火野作品は戦争文学に入れられている。

渡辺考『戦場で書く　火野葦平と従軍作家たち』（二〇一五・一〇、ＮＨＫ出版）にも指摘されているとおり、馬淵中佐が火野葦平に望んだことは、「作家の書くものじゃなくて」「兵士たちが戦場で抱く情感とか、親に対する気持ちを綴ってもらう、いわば、そういう陣中日誌のようなもの」であり、「銃後では、自分の親なり子供なり、先生なり兄さんなりが初めて戦場に派遣されて、どういう生活を送り、どういう意気込みで闘っているのかを知りたいと熱望して」おり、そのために「出征した兵隊さんの家族なり友人なりに安心してもらう証になるということで」「当時の銃後の人たちへの報告書みたいな形で書いていただ」くことだった。そのような外的条件のもとで兵隊三部作は作られ、〈作家火野葦平〉は受け入れられていく。但し、兵隊三部作だけみても、手記―書簡―三人称と形式を変え、「もう嫌になったと語り手が顔を出して話しだす」などの「道化の華」を彷彿とさせるような構想メモを残す側面もあった。その火野は、一九四二年一二月にフィリピンから帰国して

▼12月
・米英中首脳、カイロ宣言に署名
・文部省、学童縁故疎開促進を発表
・徴兵適齢臨時特例公布。徴兵適齢、一九歳に引き下げ

【社会】

▼9月
・上野動物園で空襲時に備えて猛獣を薬殺。
・鳥取県大地震（死者一〇八三人）
・西日本に台風（死者七六八人、全壊六六七四戸）

▼10月
・鉄道省、列車ダイヤを改定。旅客列車、大幅削減
・中野正剛、倒国容疑で逮捕。釈放され、自宅で割腹自殺

▼11月
・大東亜会議開催（共同宣言発表）

▼12月
・徳田秋声、死去
・都市疎開実施要綱、決定

おり、この時期（一九四三〜四四）の芥川賞の選考委員をつとめ、日本文学報国会の北九州支部幹事長になるなど、「内地」で活躍をしている。第一八回（一九四三年下半期）の芥川賞作（東野邊薫「和紙」）については、「まことにうまい作品で、今度の芥川賞とすれば、もとより、申し分はないが、私には小説作法というものに気をつかいすぎているようで、そこに首を傾げるものがあった」「しかし、出征した兵隊の妻となるべき女を、家の者がいたわり、また、いたわられながら、いろいろ気をつかっている女の気持などがよくあらわれていて、私はときどき涙をもよおした」。「私はいつもそう思うのであるが、このごろ同人雑誌を読むと、どの作品もなかなかうまい。私はそれに感心したり、また不満だったりする」「もつと、形はととのわなくてもよいから、胸の底に触れて来る作品が欲しいと思うのである」と評する。

如上の「文学至上主義的風潮について」（福田恆存）では、「一篇の感激の歌より、一双の船舶、一台の爆撃機こそ今は必要なのだ。現代に於いて、作家はかならずしも歌をうたひ、小説を書く必要はないのである。報道文学でなくてもいいではないか、なぜ、ただ報道ではいけないのか、戦争文学でなく、なぜ戦争記録ではいけないのか。必要なら、黙々と歴史記述を引き受けたらよいではないか」と書かれ、火野の「歩哨線」については「あたかも終結から仮説を編み出したやうな作為が目に立つて仕方ない。かういふテーマを扱ふのにはもつとすなほな記述が望ましい」と評する。このような言説は、平浩一が一九三九年八月の文壇状況について「「素材派・芸術派論争」の推移と「無意味」化の問題」として論じた（「太宰治スタディーズ」二〇一二・六）ことと接続され得る。この時期に至り、下島連「時局小説私感」（「読書人」九月）では「小説を作ることに汲々として生み出すとか創造するとかいふ状態から遠いのが多くの作家の偽りない状態ではないかと思ふ。人生の観察者といふ近代ヨーロッパ文学の生み出した方法を、現にそのまゝの形で日本の文学者が奉じてゐるのであつて、国体を護持し、その為めに全生命をかけるといふやうな態度が、文

【文化】

▼9月

・映画「決戦の大空へ」公開。挿入歌の「若鷲の歌」(別名「予科練の歌」)が大流行

▼10月

・映画「熱風」公開

・映画「無法松の一生」公開

▼11月

・第二次雑誌統合

▼12月

・第二回大東亜戦争美術展

・映画「海軍」公開

・映画「浪曲忠臣蔵」公開

【代表作】

▼9月

・織田作之助「挙措、親愛に満つ：大阪大会の成果」(「文学報国」)

学者にあるまじき素朴な態度であるといふ容易ならぬ迷信が牢乎として根を張つてゐるのではないか。これは所謂純文学と言はるゝものに一層甚だしい傾向であるが純文学作家と大衆作家の間隔がなくなつて、純文学作家と言はれる人々が、どし〳〵時局小説をものすに至つた為め、却つて危機が増大してゐるやうな傾向があるのである。戦争を分析し観察するやうな態度でものされた読物を読んでゐると読者は何時の間にか作者の視覚から戦争を分析し、観察するやうになるのである。巧みに情勢に調子を合はして作られてゐる時局小説に対して鋭い批判が必要であると思はれる。時局小説なるが故に健全であるといふやうな浅薄な見方は一掃しなければならぬ」と論じられ、伊藤整が「昭和十八年度の作品について」(「新潮」一二月)で、「大体に、この度の戦争になつてから、文学者である作者の従軍中の体験記として書かれる作品が多く出現した。これは当然のことであるが、それにはどうしても筆をとるものとして見た戦争といふ、一種の副次的な戦争文学の性格が主眼となつてゐる。それがこの種の戦争文学にある限界を作る。その限界といふのは、どうしてもこれ等の作品が私小説の系統を持つてゐることから生ずるところの、戦争文学にやつす、といふ書き方であり、主人公の文学者としての風格が、戦ふ者の性格をぢかに伝へぬことである。そこに現はれる美しい風格があれば、それは文学者として主人公なる作者のものであつて、「戦場における文学者」を描いたといふことなのである」と指摘するような問題も浮上してくる。芳賀檀「文藝時評」による、「古来よりの日本の文学の伝統を、改めて今日も理解してほしいのである。即ち文学は軍隊であり、而も最も果敢な苛烈な捨身の軍隊であり、精神の爆撃隊であつたと言ふこと。其の他の、歴史の戸外に立つ冷たい、否定的な作家的態度からは其の冷たさと、傍観が秀徹であればあるほど、平板な薄弱な歪曲した性格や現実の素描しか生れて来はしない」(「東京新聞」一二月七日)などの議論もある。

高木卓「「いのちのながさ」について」(「新潮」九月)では、少数のすぐれた作品の、しかもまた少数のうちに、「ほんたうにすぐれた、いのちながいもの」があると主張され、

・坂口安吾「二十一」（「現代文學」）
・太宰治『右大臣実朝』（錦城出版社）
・丹羽文雄「西下の一行に従いて」（「文学報国」）
・丹羽文雄「混血児」（「文藝」）
・火野葦平「緑々荘」（「文藝読物」）

▼10月
・伊藤整「笑わぬ人」（「日本少女」）
・坂口安吾『真珠』（大観堂）
・太宰治「金銭の話」（「雑誌日本」）
・太宰治「不審庵」（「文藝世紀」）
・太宰治「作家の手帖」（「文庫」）

▼11月
・中本たか子『新しい情熱』（金鈴社）
・丹羽文雄「春の山かぜ」（「改造」）
・火野葦平『敵将軍：バタアン戦話集』（第一書房）

▼12月
・坂口安吾『日本文化史観』（文体社）

「内部にいのちをもつほんたうの古典」と「外部の事情にヨリ多く依存して古典となつたもの」とに区分けできるとする。そして、「いはゆる私小説が、合時代的な作品よりも却つていのちながさ的なものをもち、何か本能的にさへいとほしまれる」と指摘する。「「何々と兵隊」や「海戦」はおそらく外的な古典にはなるだらうと思ふにつけても、火野氏や丹羽氏には敬意を表せずにはゐられない」と、「内的な古典」になれば喜ばしいと留保つきながら、火野作品は「外部依存の古典」であるかのような評価を与えている。

更に、この時期、用紙の統制配給が行われ、また雑誌に掲載される小説そのものが減少する。「従来通常に文藝時評の対象となつたやうな文学の頁は殆んど見られない」（中野好夫「文藝時評」「東京新聞」一一・六）状況であった。そのなかで「歴史を人間の性格によつて整理して見せたといふか、一種の分析の面白さによつた作品である。太宰氏の近年の分析的な作風が、この作品にいたつて完成したといふやうな円熟した立派さがある。／作者は確信を持つて、武人の心、藝術家の心、政治家の心を裁断し、裏がへし、解説している。しかし、読後、この歴史小説は不確かなところといふ歴史の実質の厚さの一部を失つて、ある貧困さに陥つてゐることも否定できない」と評され（伊藤整「史的な題材」「東京新聞」一二・二八）、後に野村尚吾からも「「時代相」や「環境」ではなく「性格」において書かれた」「失敗作」と酷評される（『早稲田文学』一九四四・六）も、一万を超えた部数を刷られた『右大臣実朝』は恵まれている。本誌で滝口明祥が論じているように、本作は一筋縄ではいかない作品ではあるが、一部が「赤心」として辻小説欄に掲載（のち、八紘社杉山書店刊の『辻小説集』に収録）され、利用された事実もある（この実朝の歌は、「愛国百人一首」にも所収されている）。

一方、「行動人でなかつた芥川龍之介は、ぼんやりした不安と称して、死の影に脅かされる」「報道班の作家達は」「行動人である」（上村暁「文藝」三月）と評されていた報道班の中心にいた火野は戦後、「ぼんやりした不安」を引き合いに出した遺書を残して自殺する。